

少年翔平をライバルとせよ

園長 児嶋 草次郎

10月2日(月)の朝日新聞では、「9月も史上最も暑かった」と報じていました。7月8月の平均気温が過去最高だったのに引き続き、9月も126年の観測史上で平均気温が24.91度と、1度超更新したのだそうです。朝方は少し涼しくなったと感じても、昼間になると、「あつい、あつい」と溜息をつきながら過ごした9月でした。

9月は農業にとってはとても大切な時期で、できるだけ早く畑の準備をして、野菜の種まきや苗作りをやらねばなりません。子供たちも土曜か日曜の午前中、畑への定植やポットへの仮植に勤しんで来ましたが、それだけでは間に合わないので、私も早朝、ハウスや畑に出ることも多くなっています。1時間ほどで汗びっしょりになりました。9月末現在で、大根、白菜、キャベツ等順調に育っています。

10月3日(火)のことです。朝6時前頃は、まだ太陽は東の空に登っていません。薄暗い地底で耳鳴りのように鳴くコーログの声を聞きながら、上の畑に登っていくと、遠くで鹿がピューピューと物悲しく鳴き、あたりが明るくなってくると、近くの林で山バトやモズが活動を始めます。山バトの声は頼りなげで、モズは逆に挑戦的です。私は、さっそく畑に引っ張ったヒモに添って長靴で溝を掘り、新鮮な土の匂いを感じながら、そこにカブの種を播いていきます。前日は、大根の種を播いています。この秋2回目の畑への種播きです。1回目は収穫感謝祭に間に合わせるもの、2回目は主に漬物用です。この朝は、先週と先々週に子供たちが定植したキャベツとブロッコリーの捕植も行いました。今年は、適当に雨も降ってくれ、活着率は良い方です。

7時半前、子供たちの登校とその後の朝礼に合わせるように、モネの描くような青い空の淡い雲を見上げながら、園舎の方へ坂道を急いで下りていきます。今回は、一人作業をしながら考えたことを書かせていただきます。

この日の朝見た朝刊一面で、「大谷 世界に刻む本塁打王」(朝日新聞)という見出しで、二刀流大谷翔平選手のアメリカ大リーグでの大活躍が報じられていました。「44本塁打でアメリカン・リーグの本塁打王に輝いた」のだそうです。私たちが青年時代は、日本人がああ囃(うた)たいの大きなアメリカ人たちと対等に戦えるなんて想像もできなかったけど、この50年ほどで日本人も進化したものだと思います。特に大谷選手の活躍は、新聞やテレビで度々紹介され、野球のルールもあまり知らない国民にとっても感動させられ、誇りに感じるニュースとなっています。

単なる天才ではなく、みんなが遊んでいる時でもストイックに練習に励む姿、周囲への配慮を怠らず、真面目に球場のゴミを拾うなどの少年のような誠実さも、多くのファンを引き付けて離さない魅力となっているようです。

友愛園の子供たちにも、彼の花巻東高校時代の、夢を実現するための自筆の「目標達成シート」を2年ほど前に紹介したことがあります。行動目標8つの中の「運」、「メンタル」、「人間性」という目標枠の中には、あいさつ、ゴミ拾い、部屋掃除、プラス思考、雰囲気流されない、仲間を思いやる心、感謝、礼儀、信頼される人間等などの言葉が書きこまれています。大谷選手自身がこれらを身につけるこ

とが、自分の野球に向き合う人間力を高めると確信しているわけです。ゴミ拾いや部屋掃除など、野球の技術とは関係ないように思われがちですが、これらを書きこむように導く、監督さんがすごい人なのだろうとその時は思いました。その花巻東高校時代は、寮生活をしているわけですが、ゴミ拾いだけではなく、トイレ掃除も率先ししていたとか。この「目標達成シート」を生活の中で十分に活用することで、彼の野球選手としての技だけではなく、生活習慣や人間力を確実に高めていったわけです。そういう地盤があることを私たちは見落としてはいけません。

実はこれらの言葉は、私たちがこの友愛園で、自分の運命を変えるために必要な目標とすべき資質として、常々子供たちに提示しているキーワードでもあり、友愛園の教科書「生活手帳」にも度々出て来ています。

例えば、「あいさつ」・「ゴミ拾い」・「信頼される人間」については、40年以上前に子供たちの生活に目標を持たせるために作った「生活心得」の中に出て来ます。ここに書き抜いてみます。

「一、あいさつをせよ。ありがとうを言え。」

「一、ゴミは、自分のポケットに入れる心掛けをもて。」

「一、信頼を失うことは、命を失うことと思え。」

その後作った「自立（自己実現）への道」の中には、感謝やプラス思考について次のように書いています。

「一、私を生んでくれた親、私をこの世に送り出してくれた祖先に対し、感謝します。」

「一、マイナス思考ではなく、プラス思考でものごとを考えます。愚痴や不満や恨みからは、何も生まれず、運命を与えられたチャンスととらえ、未来を開く修行に頑張ります。」

私も若かったので命令口調にはなっていますが、自分の人生を変えようとした時の自分の立ち位置として間違いではなかったと、今でも感じています。大谷選手の「目標達成シート」の「ゴミ拾い」は、どなたが考え出されたのでしょうか。非常に興味があります。

しかし、このような言葉を紙の上書き並べたとしても、それを本気で自分の資質にするための努力をしなければ、単なる飾りにしかなりません。否、飾りにもならないでしょう。職員がまず自分の価値観として実践する必要があります。口先だけで子供を指導しようとしても、子供も馬鹿ではありませんので、足元を見てしまいます。そして大人の世界をなめるのです。

ここの卒園生たちをみても、これらの資質をしっかり身につけて（本人がどれだけ覚えているかわかりませんが、感性として身につけていると思います）、社会に出て自分の夢を勝ち取っている子も多くいますし、馬耳東風で日々をすごし、社会に出て流されてしまい、貧困を繰り返している子もいます。

大谷選手は、しっかり血とし肉として生きておられるのでしょうか。最近、本屋で買った本の中には次のように書いてありました（「大谷翔平 86 のメッセージ」児玉光雄著）。

『「なりたい自分」についての、自分が強く反応する好ましいメッセージをつくり上げ、それを繰り返し唱えることが強力なパワーとなるのだ。』

「私たちの知らないところで、大谷は血の滲（にじ）むような練習を繰り返している」

「自分の考えていることを文字に変換することにより、漠然とした考えが具体化される。それが行動への指針となる。」

「大谷は、自分ではそう思っていないようだが、典型的な楽観主義者である。たとえ落ち込んでいてもすぐに気持ちを切り替え、よくない心理状態から脱出する才能を持っている。」

『「他人がポイッと捨てた運を拾っているんです。』

大谷は、ゴミが落ちていた時、拾わずに通り返しようとする、ゴミから『お前、それでいいのか?』と呼ばれているような錯覚に陥るといふ。」

これらの言葉は、現在活躍する大谷選手の心の姿を活写するものであり、野球に限らず多くの少年・青年たちに希望と勇気と行動を与えていることでしょう。

ひるがえって、現在の友愛園の子供たちはどうか。9月24日の「明倫塾」の時に中・高生の子供たちに話したことです。

8月3日の野球・バレーボール大会で、野球は決勝でさくら学園と対戦し、逆転負けをきっています。一回裏に一挙6点を入れて、普通に戦えば勝てる試合でした。しかし、3回表ピッチャーの投げるボールが乱れ始めストライクが入らなくなってしまったのです。野手にエラーも出て、ピッチャーが代っても動揺を切りかえることができず、その回7点を入れられてしまい、結局9対7で敗戦。言わば自滅でした。

明倫塾の時、最初にピッチャーをしたセイナに「なぜ負けたのか」と聞くと、意外な返事が返って来ました。

「油断したから」。

私は次のように、その時の子供たちの心情を解説してあげました。ストライクが入らなくなり、どんどん緊張感が増し、感情が高ぶってコントロールできなくなってしまったんだろう。あの時、この明倫塾でやっている呼吸法とか、論語の素読を思い出したか。そんな余裕はないよね。あの場面では、ほんとうはだれかが声かけしてタイムを取り、ピッチャーの所にみんな集まって、感情的になっているピッチャーを励ましてあげなければならなかったけど、もうみんな動揺していたからそんなことを考える余裕もなかったよね。

同じことは女子のバレーの試合についても言えるよね。女子は宮崎大会で優勝して九州大会に出場し、予選リーグで2勝。8月20日の準決勝で鹿児島県の白百合の寮と対戦。県大会の時には、ほんとうに伸び伸びと戦っていて、九州大会の予選リーグの時もチームワークがしっかりできていた。この調子でいくと決勝まで進めるかもしれないと、こっちも思ってしまった。スタートはリードしていたのに、みんなの緊張感がどんどん高まっていくのが伝わって来た。その動揺を、みんなコントロールできなくなって、相手のムードに呑み込まれてしまい負けてしまった。勝てない試合ではなかったよね。相手チームは、試合慣れしていて、みんな集まって呪文のような言葉を合唱していたし、サブする時は、その選手のところそれぞれ集まって来て励ましていたよね。そういうことをして、動揺をコントロールしていたのだと思う。

9月30日の夜の反省会の時も、再びこの問題を取り上げ、次の言葉を黒板に書き出して説明しました。

「感情が行動を決める。行動が感情を決める。」

ある心理学者が言った言葉のようだけれども、人間は、動物でもあるヒトだから、色んな本能をもっているよね。食欲、性欲、群れる欲、攻撃欲、逃走欲、他にもあるけど、これらの本能がモロに出ると、感情が興奮状態となり、行動をコントロールするのが難しくなる。冷静に言動できなくなる。ノラ猫のケンカを見ているとよく分かるよね。集団生活をしていると、群れる欲が出すぎるとなれ合い関係になり、攻撃欲が出すぎると、いじめに発展する。

そこで先人たちは、逆に行動によってその本能（感情）をコントロールしようとした。野球やバレーで、「声を出せ!」とよく言うよね。大きな声を出すことで、上ずった興奮を静めようとしている。緊張した気持ちを切り替えようとしている。論語の素読も同じ。大きな声を出す訓練にもなる。鹿児

島のチームの呪文は、その一種だと思えばよい。論語に書かれている内容も、ほとんどすべて、自己コントロール力をつけるための知恵だと言ってよい。

みんなにはいつも言うことだけど、ここには三つの理由のどれかでみんなは来ている。

- ① 親の事情
- ② 虐待
- ③ 自分の事情

みんなは、よく愚痴や不満を言うようだけど、毎年、なぜ普通の家庭ではおきかないようなトラブル・事件がここではおきるのだろう。それは、非常に自己コントロール力の弱い者がいるということ。そういう者がいるのに施設のルールをなくしてしまったら、ここは非行の巣になってしまうよね。特に自己コントロール力の弱い者はしっかり自覚して、自分の運命を変えるためにここで自己コントロール力をつけようと与えられたチャンスを生かし、がんばらなければならない。

「友愛通信」9月号にみんなの大先輩であるKさんのことを書いた。友愛園でしっかり生活習慣を身につけて鍛えられたので、社会でがんばって生き抜いていくことができたと言っておられた。社会に出て働いて、結婚して子供を作って、その子供も自立して、60歳の定年を迎えた人が言うのだから間違いないね。

みんなはこの9月に、高鍋のホテルに夕食バイキングに招待されて、お腹いっぱいごちそうを食べてきたよね。他にも色んな招待や寄付をいただいている。なぜそのような招待があるのだろうか。また大学の授業料を免除したりしてもらっているよね。

「かわいそうな子たち」だからなのか。そうじゃない。がんばっているからだ。運命に負けずに頑張っていると思ってくださっているからだ。言わば未来への投資だ。それだったら、その期待・信頼に答える責任があるよね。全員がその期待・信頼に答えているかということ、そうではないケースもあるよね。支援者の方々がそういう現実を知ってしまったら、助けてやろうとは思わなくなる。もう4月にスタートして、1年の半分が終わった。自分に与えられたチャンスを無駄にせず、自分の運命にしっかり向き合って生活してほしい。

一人で作業しながら、思い起こし、妄想に浸り、新たな希望を心に描いているうちに時がたち、現実の生々しい一日が始まります。次の明倫塾の時に、資料をそろえて、大谷翔平選手のことを子供たちに話そうと思います。

愚痴、不満を言って天に唾を吐けるのは小学生までです。回りに責任転嫁して甘えていても運命は何も変わりません。中学生、高校生になったら、自分の「家庭」を越えて、自分の人生にしっかり向き合うべきでしょう。そういう意味では、世界のヒーロー大谷選手の中学、高校生時代と何も変わらないのです。自分を信じ未来を信じ、プラス思考で日々人間力向上のために、人の見ていない所で人以上の努力をする。その結果として、大谷選手の今があるわけです。

大谷選手も高校時代、寮生活をしたということですから、不自由な生活であったはずですが、彼にとっての自由とは、未来を作る自由であって、日々の自由は重要な問題ではなかったのかもしれない。こういうところはしっかり見習ってもよいのでしょうか。活躍の舞台が違うだけですから。大谷選手にとっての修行の場は常に野球のグラウンドでした。また同じ志を持つ選手たちとの共同生活の場である寮でした。ここの子供たちの修行の場は、この大自然に囲まれた大地であり友愛園です。人生のライバルとして運命に立ち向かっていってほしいと思います。そして、「本塁打王」でなくてもよいから、自分なりの幸せをつかんでほしいと思います。夢は自分を裏切らないのですから。